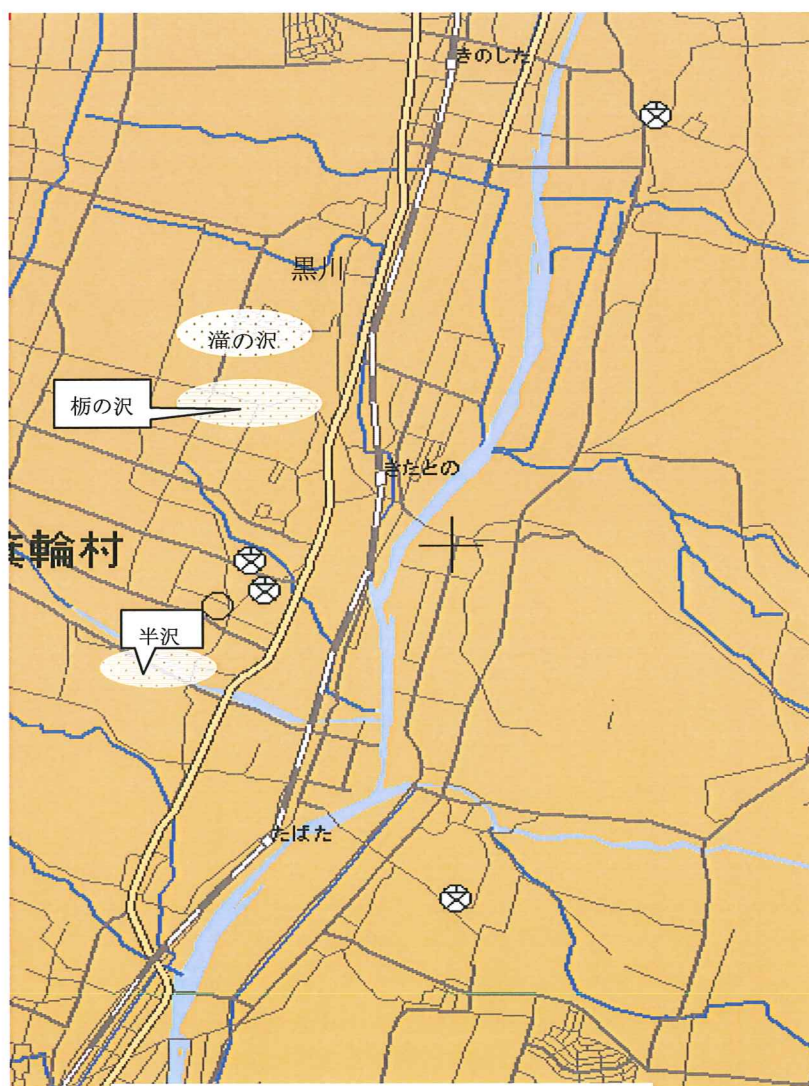


4. 断層近辺の植物と水生植物

(1) はじめに

南箕輪村地籍では天竜川右岸扇状地一帯に村内南北約5 Kmに渡って断層(南箕輪断層)が走っておりその1部は黒川断層へとつながっていると思われる。また木曽山脈北部東側の裾野からは南側の黒川も含め、ほぼ伊那市との境を流れる大清水川と箕輪地籍を流れる帯無川との間に大泉川が流れていて天竜川水系の支流が存在している。いずれもこうした河川の存在が南箕輪村地籍における台地を形成し扇状地として発達したものと考えられる。その扇状地の末端での断層からはいくつもの湧水が存在し清流となって黒川へと流れ込んでいる。湧水の水量については季節により若干の違いはみられるものの1年を通して絶えることはない。中央アルプスに蓄えられた地下水は台地内での水脈を形成し扇状地末端の断層より湧水となって流れ落ちていることは事実である。また



断層末端の地域では多くの湿地性植物が見られ、清流を利用したワサビ畑も存在する。特に滝の沢、栃の洞、半沢では広範囲に渡ってワサビ栽培がおこなわれておりワサビ栽培をするにはこうした湧水が重要な第一条件でもある。同時に湧水は地下資源としての大切な役割を持っているといえよう。しかし湧水である清流は農作業が盛んになると西天竜水系の農業用水が混じり合って流れ出し、黒川に流れ込む。そうした河川

植—33

○は広範囲に行われている主なワサビ畑

出典「電子国土」

は清流の汚れる原因を作り出して少なからず植生にも影響している。(バイカモが少ない) また土砂等も運び込まれてくることからワサビ栽培にも支障をきたしているともいわれている。

(2) 調査期日 平成20年8月～10月、平成21年4月～6月、8月

(3) 調査目的 断層と湧水に伴う水草の状況と植生について

(4) 調査方法 観察してメモをしそれをまとめて考察した。

(5) 黒川流域に見られる植物

黒川はいわば西天竜からの用水路となっておりその末端は排水路となって天竜川に流れ込んでいる。途中から湧水とも合流して流れ出す黒川はやがてはナイロン、ペットボトル、空き缶等のごみ類に加え、雑排水を含んだ河川と化している。汚れ気味の川の中にも水を好む植物が見られる。その中で特に多く見られたのは常緑色で多年草でもあるクロモの群生が川の流れの中に生育していた。そのクロモに交じってバイカモの存在を確認することもできた。しかし何か手を施さないとやがてこのバイカモは消えて無くなる運命ではないかと懸念される。

現在流れの限られた場所にクレソン(オランダ



植-34

黒川に群生しているクロモ(20, 11, 14)



植-35 黒川でわずかに生育の見られたヤナギモ(20, 11, 14)

ガラシ)の生育と又ほんのわずかではあるが汚れ気味の黒川にヤナギモやバイカモの生育を確認できたことは嬉しいことでもある。

黒川に流れ込む支流(西天竜→ワサビ畑→黒川)で、その左岸にはカモガヤ、カモジグサ、ウシノケグサ等のイネ科の植物が繁茂しており又水面の近くには比較的美しい水で育つクレソン(オランダガラシ)やセリ、ユキノシタそして川底にはバイカモの生育を見ることができた。

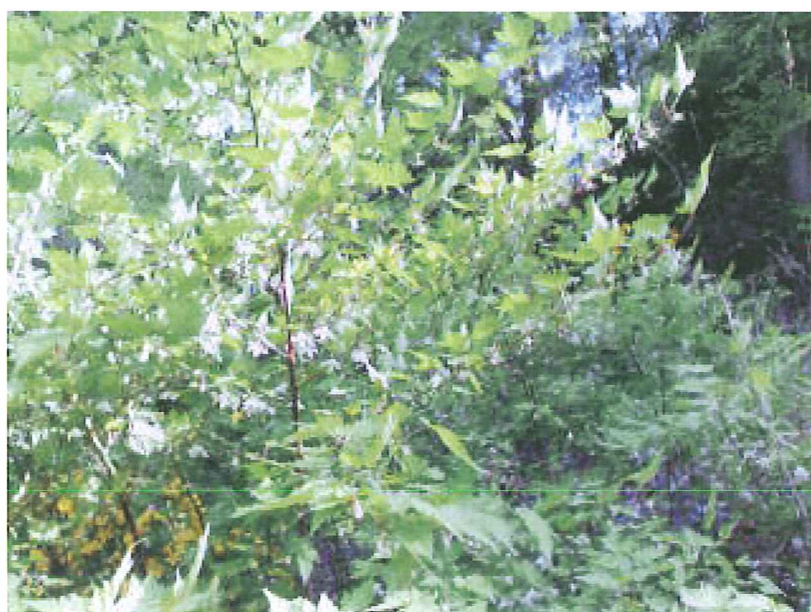
(6) 滝の沢、栃の洞でみられる主な植物

北に向かう国道より塩の井から旧道に入った左手一帯は湧水の多くみられる地籍である。谷間の沢に入り込むとやや開けた場所があってそこには豊富な湧水がみられる。



植一36 年間を通して絶えることのない湧水(滝の沢) 21, 4, 27

その1つが滝の沢でありもう1つは栃の洞と言ってどちらも広い範囲にワサビ栽培がおこなわれている。そこでこの地域での主な植物について調べてみるとタネツケバナ、ツユクサ、イタドリ、ツリフネソウ、ヒメジョオン、ヨモギ、キツリフネ、マメヅル、カラマツソウ、フキ、ヒメオドリコソウ、チヂミザサ等に交じってイネ科のカモガヤも見られた。更に北斜面には木本類の、ハイイヌガヤが多く見られた。又およそ15m～20m程のスギやケヤキを始めクルミ、クリ、コナラ、ニセアカシア、ズミ、エゴノキ、エゾエノキといっ



植一37 花を下にたらしめて咲くエゴノキ(滝の沢) 21, 4, 27

た落葉樹がワサビ畑周辺に立ち並んでおりワサビ畑の静けさをかもしだしている。

(7) 半沢に見られる主な植物

南箕輪村で「ホタルと水芭蕉の里」として知られるようになった半沢では多くのカワニナが棲息しており、それは地元のホタル愛好者の方々「半沢を愛する会」の手によって手厚く保護され毎年多くのホタルの発生を見ることができる。更にここでは西天竜からの水も流れ込んではいるが湧水も豊富でそれを利用してのワサビ栽培もおこなわれている。この近辺で見られた主な植物をあげてみるとスギが多く林立して数本のヒノキと共にコブシ、ミズキ、ヌルデ、ニセアカシア、クワ、ソヨゴ、イチイ、クルミ、キャラボク等の木本類が見られた。次に草本類をあげてみると半沢北川の道路わきにはイタドリ、ガガイモ、アカネ、ヤブガラシ、ホタルブクロ、タケニグサ、ヤマゴボウ、ゲンノショウコ、アレチマツヨイグサ、が生えていた。道路から沢の方に入っていくとクサコアカソ、クサノオウ、カモガヤ、オヘビイチゴ、ヤブカンゾウ、ギシギシ、ヒメジョオン、ヨモギ、アカツメクサ、シロツメクサ、ヒルガオ、チヂミザサ、ヤマゴボウ、ギョウジャニンニク、イワタバコ、イヌワラビ、等の植物がみられカワニナ

の棲息している小川にはセリを始め湧水を好むクレソンや水生植物のクロモがみられた。更にさかのぼって進むとアメリカセンダングサ、ウマノアシガタ、マムシグサ、ウバユリ、ツリフネソウ、ツユクサ、ドクダミ、ヤマオダマキ、イノコヅチ、

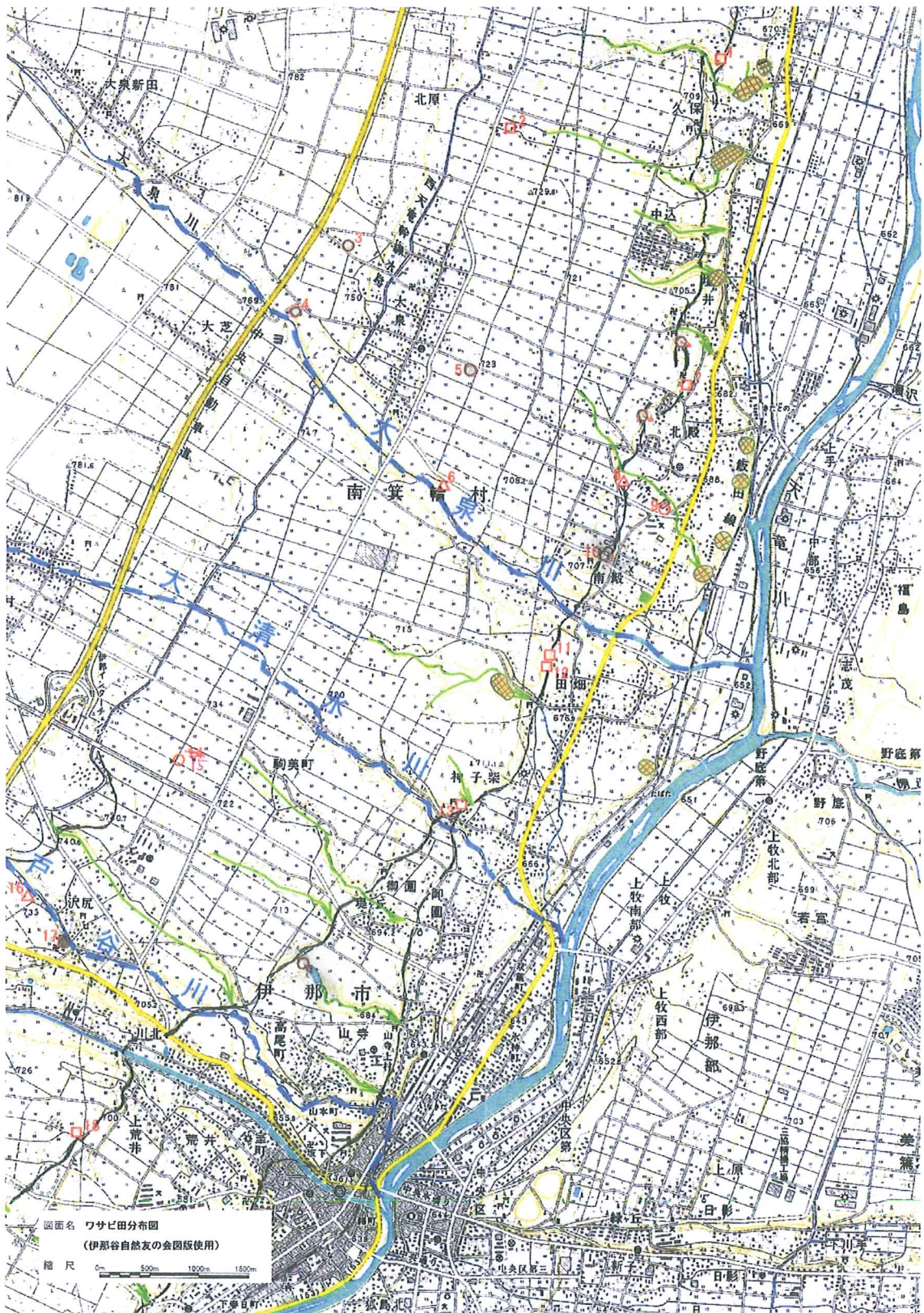


植—38 半沢北側水路には多くのカワニナが育っていてゲンジホタルの発生が見られる。(21, 8, 26)

オオバコ、ウド、タケニグサ、ミズバショウ等の植物に交じって帰化植物のアレチウリまでが入りこんでいて、その生育には驚きを感じさせらる。

(8) 湧水地域でのワサビ栽培について

南箕輪の1つの特徴としては豊富な湧水が存在していることからワサビ栽培がおこなわれていることである。とはいっても以前に比べるとその栽培面積は減っていると思われるが、(事実、かつてのワサビ畑がその痕跡を残しながらも荒れ地となって消



植一39 湧水（丸印）とワサビ畑分布（印）の様子

（松島信幸氏・明石浩司氏作成「南箕輪村横井戸等分布図」

失っている土地もある) 数か所のワサビ栽培地を見ることができる。

ワサビ栽培には敷き詰めた砂利石と湧水が重要なポイントでもあり、砂利石などに不純物や泥などがたまったりすると成長が遅れたり根が傷んでワサビそのものへのダメージは大きいようである。(地元栽培者の話)

植—40

ワサビの栽培に当たっては12月に種子をまき、翌年の9月から10月にかけてワサビの収穫がおこなわれるようである。(地元栽培者の方の話による) 湧水利用の上にワサビ栽培は成り立っていることがわかるが、常に砂利石へのごみや土砂を洗い流す等の作業を必要としている。そのためワサビ栽培はワサビ畑の清掃作業と水管理が



(滝の沢に広がるワサビ畑・この水路には西天竜からの水や農業用水が流れこんでいて水質はやや汚れている。)21, 4, 27

大事な仕事にもなっている。用水路には西天竜からの水も流れ込んでおり、地元の方のお話によると毎年のように水路を雑菌等の危険から守るために、年に1~2回の用水路の清掃が行われているとのことであった。



植—41

半沢でのワサビ栽培

(21, 8, 26)

(9) 結果の考察

植—42—

- ① 黒川については比較的水はゆったりとした流れになっていて水深もおおよそ80cmほどである。川幅も3mほどでその両サイドは石積みとなっており排水路としての役目をなしている。川底は砂利、土砂等で覆われ土砂の堆積したところにはクロモを中心としての水生植物の生育を見ることができた。そのクロモに交じってゆるやかな



ゆるやかに流れている黒川（21，4，27）

流れの中にヤナギモやバイカモまたクレソンも確認できた。そのことはまだまだ昔からの清流の残っている河川としての存在が明らかになったものとして捉えたい。両サイドの石垣の上部は草むらとなっていて少なからず自然を取り入れた環境が残されており、川魚や水生昆虫等の住みやすい河川が残されているといつてよい。従ってここ黒川ではサワガニをはじめカワニナ、ヤゴ、トビケラ(地方によってはアオムシ、ザザムシの呼び名あり)等の水生昆虫の生存も確認できた。ただこの黒川には天竜川水系や西天竜からの水が流れ込んだり雑廃物(空き缶、ペットボトル、ナイロン等)等による汚れのために美しい水を好む水生植物等その生育に悪影響が生じはしないかと懸念される。



- ② 滝の沢川は黒川の支流でワサビ畑内からの水の流れは比較的速く、雨期においては水量も多い。また特に農繁期には西天竜からの落水や水田からの落水も生じたりして

植—43— 滝の沢川

(黒川の支流で西天流からの水と湧水との混合水。川底は土砂、砂利で形成され、バイカモもみられる。) 21，4，27

湧水での水路は汚れ気味になることもある。そうした水路の流れの中に美しい水を好むクレソンやバイカモの生育の確認ができた。特に最近消失しつつあるバイカモの存在は滝の沢川にとっては極めて良い水質の環境状況であることの証明でもある。

この水路は昔からのものとして近隣の方々の生活用水路としての使用を可能にできた。従ってこの地区住民の多くの方々は湧水から流れ出る水の恩恵を多年にわたり受けてきたものと思われる。こうした水路に水生昆虫が住みついたり水生植物の育つような豊かな河川環境を維持するには雑廃水をなくしたり、コンクリート壁で固めるようなことのないよう河川管理面での工夫が必要ではないかと思う。

- ③ この地域では湧水が多く存在していることから広い範囲でのワサビ栽培がおこなわれている。特に調査のできた滝の沢、栃ヶ洞、半沢では手入れも行き届き広範囲にわたってのワサビ栽培がおこなわれていて湧水の大切さを感じさせられる。そうした湿地的条件の中では針葉樹のスギが多く見られまた湿り気の土地にはキツリフネやツリフネソウ、セリ等が、高木の下にはウバユリ、ミズヒキ、ヌスビトハギといった湿地を好んだり日陰を好むといった植物が多く存在していることがはっきりとした。半沢の湿地帯にはミズバショウも見られたがこれは移植されてその個体数を増やしているものと思われる。またギョウジャニンニクやイワタバコについてはこの地のものでないだけに今後の生育を見守っていく必要がある。

5. 最近繁殖している帰化植物について

(1) は じ め に

帰化植物とは自然の力によらず、人為的な力によって意識的または無意識的に移入された外来植物が、野生の状態で見出されるもの（南箕輪村史第1章第5節）として定義づけられている。更に第5節では「人間がよそから持ち込んだ植物」「野生の状態で見出されること」「外来植物」の三つの観点がはっきりと明記されている。「外来植物」には異論もあるようですが、ここでは本来生育していた土地、場所、地域から遠く離れ、何らかの事情(人為的に、自然界での活動の中で、物の移動の際に付着する等)により存在すべき場所ではないところに根を下ろし、その地で繁殖し野生化している植物として捉えていきたい。よって日本の場合外来種で野生化し繁殖している植物は全て帰化植物として捉える事ができる。たとえばクレソン、シロツメクサ、ヒメジョオン、ブタクサ、ヒメムカシヨモギ等はまさに帰化植物である。

今回はそうした帰化植物の中で特に生育範囲を広げ繁茂している数種類について考え、南箕輪村地域における帰化植物の状況について調査しそのことが他の植物（特に在来種）に与える影響等についても考えてみようと思いた。

(2) 帰化植物の特徴

在来種の植物が人為的であったり、帰化植物の影響を受けたり等して次第にその場を追いやられたりまたは個体数を減らしたり消滅してしまったりといったことは当然

起こりうることとして考えたい。そこで1つの帰化植物ヒメオドリコソウについて考えてみると根を張り出し、仲間を増やしながら次第に細長い根を張り出していく。その根は綿毛のようになりやがては他種の根を包み込み他種の繁殖を食い止めている。同時に再び仲間の種を順次増やしながら繁殖範囲を広げていくといった植生を持っている。そのためヒメオドリコソウは一旦侵入すると他種を押しよせそこを中心に一面に広がっていくことが多い。またセイタカアワダチソウについては実のところその根に毒素（アミン）を持つことによって他の植物を寄せ付けないようにしている。つまりこの毒素の力で他の植物が繁殖できない生活環境を作り出している。したがってこのような帰化植物は次第に繁殖範囲を広げつつ、他の植物を圧倒しながら自分の生活圏を拡大していると考えてよい。こうした帰化植物の強さはアレチウリ、（つるがまきつき他の植物を弱める。）オオブタクサ（多量の花粉から子孫を増やしている。）等にも見られ、セイヨウタンポポ（初冬においても花を咲かせ種子を振りまく）にしても在来種に比べると外来種の繁殖力の高さを物語っている。

(3) 調査期日 平成20年8月～10月、 平成21年4月～6月、 8月

(4) 調査目的 帰化植物の中で特に最近個体数を増やし、生育範囲を広げて繁茂している数種類を取り上げ、南箕輪村地域における帰化植物の状況について調査してみることにした。

(5) 調査方法 観察してメモをし、それをまとめて考察した。

(6) 広がりを見せる帰化植物

① セイタカアワダチソ

植—44

この植物は日本に侵入してたちまちのうちに広がりを見せた帰化植物ではあるが、昭和30年代後半の高度成長期に入ってから外国貿易が盛んになり出したころ大量の木材等の輸入と同時に付着した種子等によって日本の地に根を下ろし繁殖し出したといわれている。こうした繁殖力の強い植物が入ってくると



(南箕輪村地籍で繁茂し続けているセイタカアワダチソウ。人手の入らぬ荒地や土手等から繁殖範囲を広げている。) 20, 11, 14

本来あったと思われる在来種等の植物は追いやられたり、数を減らしたりまた消滅する等してその地域の生態系は大きな被害を被ることになる。そのことは自然環境にも大きな変化をもたらしてくることから何らかの形で手



植—45 (塩の井地区更地に侵入しだしたセイタカアワダチソウ)

20, 11, 14

を打つなり処置を考えていく必要があるものと思う。

この植物が上伊那に侵入してきたのは昭和60年代になってからのように思われるが定かではない。ある文献によると平成2年と記されているものもある。侵入の原因は恵那山トンネル開通後中京方面との交通量が多くなってからのように思われるが、中央道工事における土砂等に混じって運ばれてきた可能性も十分に考えられる。いずれにしてもこの種は前にも記したように繁殖力の強いことから、南箕輪村地域においても例外なく多くの場所で繁茂している。

植—46

このセイタカアワダチソウは大泉川を中心にその両サイドで繁殖し人手の届かない雑草地へと広がっている。国道153号より約500m西側の地籍からの生育が目立っており、その範囲は大芝地籍大泉川上流まで勢いを伸ばしている。又北殿駅北側



で塩の井北殿境の更地や (土手からの侵入がみられるセイタカアワダチソウ) 20, 11, 14

国道153号バイパス
予定地での更地には多
くのセイタカアワダチ
ソウが見られた。(平成
21年道路工事前)

大泉川ラインから両
サイドへの広がりには約
200mほどとなっ
ており、条件さえ整えば
人手の入らない荒地、
更地へと侵入し繁殖し
ている事実がよく見ら
れるのはこのセイタカ
アワダチソウの特徴で
もある。



植—47

(大芝大泉川河川敷に一面の広がりを見せる
セイタカアワダチソウ) 20, 11, 14

晩秋でも花を咲かせることのできるセイタカアワダチソウは寒さにも強く冬場は地上部で枯れても地下での根は生きのびることができる宿根草である。従って花粉で子孫を増やし、翌年には根からも芽を出すことによって幅広く仲間を増やしていくことのできる植物として捉える事ができる。

② オオキンケイギク

このオオキンケイギクは
昭和50年の半ば頃上伊那
に侵入してきたと思われる。
この頃大田切駅近辺の土手
を中心に多くのオオキンケ
イギクが目撃されていた。
この種はセイタカアワダチ
ソウと並んで分布を急速に
広めていることから帰化植
物の中でも目立った存在と
して注目できる種でもある。

天竜川の堤防端や河川敷
を中心に広がりを見せてい
るがこの種の植物はやはり
条件が整いさえすれば直ぐ

植—48



(南箕輪地籍の天竜川河川敷に侵入してきたオオキンケイギク)

21, 6, 4

と侵入し仲間を次第に増やしている。

伊那市の堤防端にも多くのオオキンケイギクを確認できるが、今年度南箕輪村地籍における天竜川河川敷への侵入が確認された。しかしまだその個体数は少ない。しかし人手を加えない限りやがて大泉川や天竜川等の河川敷や堤防において繁殖し群生を



(田畑の民家近辺に見られるオオキンケイギクの群生) 21, 6, 4

なしていくのは目に見えている。オオキンケイギクは北アメリカ原産の帰化植物であるが、外見上の花の美しさから多くの人に受け入れられ愛されている花として考えられる。そのため人為的による庭での栽培を中心に移植されたり刈り残されたりして繁殖範囲を拡大し、そこから野生化しつつ広がりを見せている植物として捉える事がで

植—50



(大泉川に侵入し出したオオキンケイギク) 21, 6, 4

きる。特に南箕輪村では人家近くにオオキンケイギクの繁茂している状況がみられることからその可能性が高い。

この種の花の中には八重咲きのオオキンケイギクも存在していることから栽培種として個体数を増やした可能性も強い。それは民家での家庭栽培種として植えつけられたものが繁茂し広がりを見せているのではないかと推

定される。

このようにオオキンケイギクは人手を加えなかったり、荒廃地であったり、自然地であるような場所へと侵入し個体数を増やし繁殖している。伊那市や駒ヶ根市方面では河川敷や道路において大群落をつくっている状況を目にすることができる。そのように強靱な性質をもった植物だけに河川敷での在来植物への影響も大きく、「特定外来植物」として指定されている害草である。

ある調査結果にもはっきりと記されておるがオオキンケイギクは種子によって繁殖し、地上部を抜いても残った茎からまた成長するといわれている。5～7月に開花した後種子をつけ、それが地面に落ちる。種子は土壤内に多量に含まれその場でまたは運搬された場所で発芽のチャンスを伺い子孫を増やしている。このようにオオキンケイギクは種子または地下茎で生存し続けることによって仲間を繁殖させ生活圏を広げているといえる。

南箕輪村地籍の国道より少し大泉川を西方面にさかのぼった地点においても、左岸約10mほどに渡ってオオキンケイギクの群生が確認された。八重咲きが多く見られたのは人為的に運び込まれたのが野生化したものと思われる。

③ アレチウリ、

この種については以前より南箕輪村地籍には侵入しており、広い範囲での繁殖状況を見ることができる。前に記した帰化植物と並んで荒廃地や自然地で我が物顔に繁殖している。アレチウリについては各行政が中心となって抜き取るなどしてその駆除に努めてはいるがその繁殖力の強さには手が回らないのが実情でもある。

植—51



(田畑地区天竜川の堤防部分に見られるアレチウリ) 21, 6, 6

5月になると発芽して間もないアレチウリの様子を見ることができるが、南箕輪村においても6月頃より広い範囲で生長しているアレチウリを確認できる。多量の種子を落とし、発芽し、他の植物に巻きついたりしながら繁殖していこうとするアレチウリの底力を感じ取ることができる。アレチウリの生育は葉を広げながらの早い生長がみられる。そのため他の野草に覆いかぶさる等太陽を遮っていくことになるから、在来種への被害も大きく正に害草の最たるものといえる。

つまりアレチウリは、繁殖力も旺盛でその個体数を増やしながらかも他の植物にはダメージを与えつつ仲間を増やし、次第に勢力範囲を広げている植物として捉えられる。生長した暁には全面に渡って広くアレチウリで覆い尽くされている様子を目にすることができる。

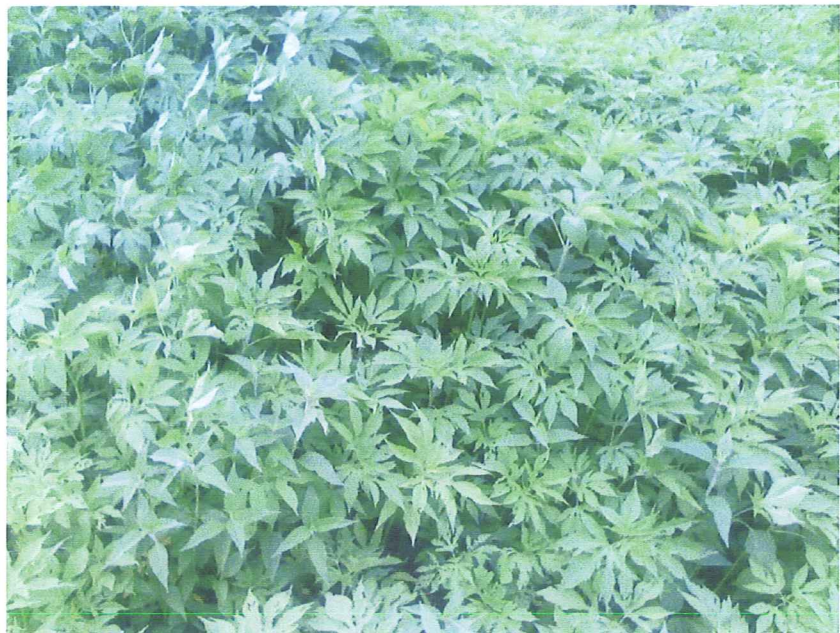
アレチウリが繁茂することによって多くの植物が生育環境を奪われ、今までの自然環境や生態系が破壊され様子が大きく変化してしまうことになる。そうしたことからアレチウリもオオキンケイギクと同様に「特定外来植物」として指定されている。南箕輪村も今まで以上に行政の力で村民が一体となって被害を予防するためにもこの害草駆除を考えていく必要があるのではないと思われる。

④ オオブタクサ (クワモドキ)

このオオブタクサは昭和27、8年頃に日本に入ってきた植物のようである。キク科の植物で花粉を多く発生することから花粉症の原因にもなっている。また葉の形がク

ワの葉によく似ていることから別名クワモドキと呼ばれている。

この植物は南箕輪村へは40年程前に侵入してきたものと思われるが定か



ではない。上の写真 (田畑地区天竜川河川敷に見られるオオブタクサ) 21, 6, 6 植—52 でもわかるように幅広く繁茂し葉を大きく広げていることからその根元はまるで暗闇であり他の植物の入りこめるような環境ではない。草丈は3m

程までになって花粉をまき散らし自分の個体数を増やし続けている。その花粉は人体にも悪影響を及ぼし、花粉症を引き起こす原因にもなっている。そうしたことから考えてこのオオブタクサはセイタカアワダチソウと並んで正に公害草でもある。

⑤ ブタクサ

植—53

北米原産のブタクサは日本には明治時代に入ってきたようである。オオブタクサに比べると草丈は1 m程と低いが多く花粉を発生し、やはり花粉症の原因にもなっている。南箕輪村への侵入は昭和40年代と思われるが定かではない。人手の入らない土手や荒地への侵入がみられ、春日街道沿いにも多くのブタクサの繁茂している様子を目にすることができる。



春日街道沿いに見られるブタクサ（21, 8, 26）

ある調査によるとこのブタクサを食べる「ブタクサハムシ」という昆虫が日本に入ってきているためブタクサが徐々に減少している地方もあるようだ。

⑥ ブタナ（和名タンポポモドキ）（キク科）

欧州原産の多年草で花茎は 50cm

植—54

以上にも伸びる。伊藤浩司氏によると1933年札幌市近郊に侵入したものを「タンポポモドキ」と命名、北村四郎氏は1934年六甲の山採品について「ブタナ」と名付けた。

ブタナはフランスの族名「ブタのサラダ」を訳したものという。現在は上伊那地方の各所にみられる。南箕輪村でも大芝高原の芝地で日当たりのよい所に多く生えているのが見られる。



ブタナ

⑦ ヒメオドリコソウ (しそ科)

植—55

欧州原産、明治25年(1893年)松村任三氏が東京駒場で検出。以来徐々に分布が広がってきた。2年生草で茎は根本基部より直立、高さ10～25cm。茎頂の苞葉が紫紅色を帯びているのでよく目立つ。



この種は湧水地域(例えば滝の沢)にも侵入していきわ

畑作地や雑草地に見られるヒメオドリコソウ (山下正幸氏提供)

ば南箕輪村に幅広く繁殖し続けている帰化植物といえよう。現在この地域では冬でも繁殖し畑地の地面を覆い尽くす等していることから、作物の害草となっている。

⑧ ハキダメギク

熱帯アメリカ原産の1年草である。茎は又状に分かれ高さは10cm～15cm、花冠は白で5mm程度の小さいものである。上伊那へは1980年頃見られるようになり、現在は畑等ちょっとした空き地をはじめ至る所に群生し農作物の害草になっている。南箕輪村においても広い地域に渡って目にすることができる。

植—56

このハキダメギクは庭の片隅や畑作地を中心に広がりを見せている植物で小型ではあるが確実に繁殖しているといえる。



畑作地等に多く入り込んでいるハキダメギク。20、10、1 (山下正幸氏提供)

(7) 結果の考察

今回の調査で見えてきたのはオオブタクサとアレチウリの繁殖範囲がほぼ同じ地域で繁茂しており、正に共存しているようにも思える。これらの帰化植物は天竜川の堤防や河川敷で群落をなし、又中央道両サイドから大芝高原近辺の範囲において共に繁茂し、群落をなしていることが分かった。更には大泉川周辺でもこの種の繁殖状況を見ることができる。セイタカアワダチソウについては主に大泉川を中心にしてその両サイド約300m程の広がりを見せながら、住宅地内の更地部分への侵入も見られた。今後の調査によってはオオブタクサ、アレチウリとセイタカアワダチソウがその生育圏を分けあっているようなことが明らかにされるかもしれない。(1部大泉川での共存もある) こうした帰化植物はオオキンケイギクを含め、いずれにしても異常なまでに繁殖力が強く在来植物を滅亡させてしまうような力を持っている。畑作地へのヒメオドリコソウやブタクサは野菜に対しても悪影響を及ぼしており正に害草である。最近アレチウリなどは行政指導のもとにその駆除も行われてはいるが、なかなかこの繁殖力には手が回らない状態でもある。荒れ地への侵入を試みているこれらの帰化植物を何とか駆除していく方策を考えるべきかと思われる。

植—57



セイタカアワダチソウとアレチウリが共存し、生育している。中央道近辺(21, 8, 26)